



## 民主主義とコーヒー

普段何気なく味わっているコーヒーだが、コーヒー豆の不作や中国の大量消費などによって値が上がり、日本でも一部メーカーは1日から値上げを行っている。そのコーヒーにまつわる面白い話が新聞に載っていた。引用してみよう。

\*

### ■民主主義や自由の培養土

ドイツ文学にはコーヒーにまつわる小説や詩が多く、その縁もあって世界史との関わりを研究してきました。そこから見えるのは民主主義や市民革命の培養土になった隠れた役割です。

東アフリカからアラビアに伝わったコーヒーは、11世紀ごろ、イスラム神秘主義の宗教者、スーフィーによって飲まれ、広まります。眠れない、興奮する、食欲がなくなる、という通常なら否定的な性格が、神との合一を求める彼らの祈りや生活にマッチしたのでしょう。

やがて聖地メッカで飲まれ始め、1554年にはオスマントルコ帝国の首都イスタンブールに、社交場となる「コーヒーの家」が建ちました。

トルコの軍勢はバルカン半島を征服、神聖ローマ帝国の首都ウィーンを包囲するほど西欧の脅威でしたが、文化面は羨望(せんぼう)の対象でもありました。東地中海の支配者になった1669年、トルコの駐仏大使が太陽王ルイ14世の治めるパリに着任すると、ブルボン王朝の要人を招き、見事な磁器とともにもてなす「コーヒー外交」を展開します。これに歩調を合わせるようにアルメニアから来た出稼ぎ商人がサンジェルマンに最初のカフェを开店させ、やがてパリ全体に広がっていくのです。

18世紀の啓蒙(けいもう)思想家モンテスキューは「理性を明朗ならしめる」とコーヒーを形容

します。1719年、300軒のカフェがパリにあり、「フランスがこれほどおしゃべりしたことはかつてない」とまで言われます。

それから70年後、仕事からあぶれた知識人たちのたまり場となったカフェは王制打倒の溶鉱炉になっていきます。無関係だった人々につながりを持たせ、長い時間の議論の場を提供したり、情報を交換したりするセンターになったのです。為政者側から見れば、厄介な存在だったでしょう。スパイを潜り込ませ、武力で弾圧します。

逆に言えば、カフェが隆盛の時は、人々の自由度が高いということです。民主主義が花咲いたワイマール共和国当時はドイツで最もカフェがはやった時代でした。ここを根城に、革命家や社会主義者が活動します。

戦後の日本にも若者が集まって議論する場になる時期がありましたが、今、林立する米国生まれのコーヒー店では似合いません。しかし、カフェは与えられるものではなく、自分で作るものです。議論した世代が青年に自宅をカフェに開放したっていいんじゃないでしょうか。

忘れてはならないのは、コーヒーが中南米やアジア、アフリカの国々の低賃金労働に支えられた商品だということです。コンビニの100円コーヒーはありがたいが、せめて、価格の1割でも上乘せして、生産国に戻す仕組みを作ることが、コーヒー享受者の義務でしょう。(朝日新聞11月1日朝刊 臼井隆一郎東京大学名誉教授の談話)

\*

コーヒーの話がこんな風に広がっていくところに学問の楽しみがあるといえよう。